

2017年7月フンザ周辺の山々を巡る旅

イスラマバードからカラコルムハイウェイを迂回して近道をするつもりが、道路の決壊に遭って立ち往生したが、なんとか車を乗り継いでチラスに至り、ツーリスト・オフィスでチェックを受ける。治安のためか自然保護のためか知らぬが、こと細かく質問されて、尋問を受けているようである。チェックが終わって出発する段になって、フンザまでの新しい運転手が乗継前の運転手から聞いていたよりも三千円強の値上げを言ってくる。ガソリン代だという。先程のツーリスト・オフィスの職員までが、尋問口調とはうってかわって、それは安いと口調を合わせる。お前らはグルなのかと言いたかったが、金持ち？喧嘩せずで要求を飲む。

出発する際に、ツーリスト・オフィスの職員に有名な岩絵を見ていかないのかと言われるが、今は一刻も早くフンザに着きたかったので、後ろ髪を引かれる思いでチラスを後にする。フンザとの中間点あたりまで来た時に知り合いの車に乗り換えてくれと言われる。その時、さきほど値上げとなった理由がピーンとくる。最初の金額が相場で、後半を知り合いにまかせることになったので、手数料を上乗せしようという魂胆だったに違いない。まんまと現地商法にしてやられたが、二重払いをさせられたのではたまらないので、前半の運転手に支払った料金の一部が後半の運転手に手渡される所をしっかりと目撃しておく。

後半戦に入ってすぐに三大山脈ジャンクション・ポイントに着く。ここはインダス川とギルギット川の合流点で、ナンガパルバット、カラコルム、ヒンズークシュの三大山脈が眺められるということで、先程のチラスの岩絵と並んでツアーでは必ず立ち寄るところであるが、あいにく曇っていて高山の展望は得られないので、先を急ぐことにする。

合流点までは9年前にカラコルム登山を終えてスカルドからインダス川を下降した時に通っているが、これから先は未知のコースである。フンザまでの道は思ったよりも立派な道で、よく言われる危険なカラコルム・ハイウェイの経験をせずに終わってしまった(9年前にチラスから先を下った時も、暗かったし、眠ってしまったこともあり、危険を感じることはなかった)。

今夜のホテルはフンザの中心からは離れた小高い丘の上にあるので、急な坂を高さ500メートル近く喘ぎながら登って目的地に着く。当然の事ながら運転手からは新たな要求はなかったので、そのままホテルに入る。部屋からはフンザの町が一望でき、ヒンズークシュの高峰もほしいままにできる素晴らしいシチュエーションである(ただし、今日は山頂付近には雲がかかっているが)。

今回、フンザには予定どおり3日間滞在する(上部フンザのパスー滞在を含む)ことになるので、存分楽しんでこようと思う。ただひとつ残念なのは、今晚のホテルが丘の上にあるので、町の中心からは離れているためまわりにはレストランがなく、ホテルのディナーまでは3時間近く待たなければならないことである。実は早朝に軽食を食べただけなので、かなり空腹だったが、ディナーの時間まではブログを書いたり景色を眺めたりして時間を潰さざるをえなかった。

昨日とは違ってかわって雲ひとつない天気恵まれ、小高い丘の上にあるホテルはヒンズークシュの山々の眺めが独り占めである。展望台からは眼前には雪と岩の殿堂たるウルタルと鋭い岩峰のレディー・フィンガーが圧倒的な迫力で迫り、正面にはヒンズークシュ山脈屈指の高峰であるラカポシが悠然と聳え、その脇にはディラン、スパンピークという名峰が控えていて、まさに壮観そのものである。



ラカポシ

朝食後にフンザの町に向かうが、フンザの最大の名所であるバルチット・フォート(昔のフンザの支配者の城)はフンザの町を見下ろす高い所に位置しているため、GPS地図で道を選んでいけば、大きな下降はせずに到達できると踏んだのだったが、途中で道を間違えてしまったためにフンザの町中まで降りてしまい、また登り直す羽目になってしまった。



フォートの登りの最後の辺りで、日本人を乗せた車に追い越される。客の日本人から乗車を勧められたが、あと少しだけだったので、断って登り続ける。フォートの入り口に着いてみると、さきほどの日本人が休んでいる。なんでもカラチに商用で来ていて休みを利用してフンザに来ているそうである。彼と一緒にフォートの中に入り、現地のガイドの説明を聞く。私は英語が不得手なため、あまりよくわからなかったが、陳列物が日本ならば、厳重にガラスの中に入れられ手を触れられないばかりか写真も撮影禁止となっているのに対して、ここは多くが触り放題で、別途支払さえすれば撮影も自由となっているのがおもしろかった。

フォート見学の後、ウッタールで遭難した長谷川恒男の遺志を継いで建設されたメモリアルスクールや郊外の岩絵を見てからパサーに向かう。

翌朝、シスパーレのモルゲンロートを撮影をするために4時半にホテルを出版する。1時間歩いてもシスパーレは姿を現さず、空はどんどん明るくなってきているので、少々あせってくる。しばらく進むと稜線がモルゲンロートに燃えているのが見える。それからはスピードアップしてなんとか頂上のモルゲンロートが残っているうちに間に合った。もう十分早ければもっと見事なモルゲンロートが見られただろうが、これだけ見れただけでもパサーに泊まった甲斐があったというものである（後から知ったことだが、平出和也は数日後に念願のシスパーレを新ルートから登頂したそうである）。



その後はヒッチハイクやバスを乗り継いで国境の町ストに至って一泊し、一日がかりでフンジェブラ峠を越えて中国シルクロードの街タクシュルガンに達し、翌日は民族の十字路と言われるカシュガルに向かったのだが、その途中、高峰ムズターク・アタの麓を辿るので、展望を楽しみにしていたのだが、残念ながら厚い雲に覆われていて全容を望むことはかなわなかった。

